

平成 2 9 年度

となみ散居村学習講座

となみ散居村を学ぶ

第 5 回

・期 日 平成29年10月15日(日)

・内 容 となみ散居村の地域財産再発見

“城端線は何を変えたのか”

「 バスハイク 城端線をもっと知ろう 」

企画・講師 城端線 120 年記念事業実行委員会



中越鉄道最初の機関車
(南砺市立中央図書館蔵)

平成29 年度

「となみ散居村を学ぶ」 第 5 回

講座内容 ～となみ散居村の地域財産再発見～

「 バスハイク 城端線をもっと知ろう 」

- (1) 日 時 平成29年10月15日(日) 8時00分～16時30分
(2) 集合場所 となみ散居村ミュージアム情報館 (研修室前で受付)
(3) 日 程 8:10 ～ 散居村ミュージアム出発
8:20 ～ ① 大矢四郎兵衛像(砺波市鷹栖)
9:20 ～ ② 旧加越線津沢駅跡(津沢駅児童公園)
10:20 ～ ③ 城端線・旧加越線立体交差(南砺市福野地域)
11:20 ～ ④ 旧加越線井波駅舎
12:00 ～ 昼食 (場所:道の駅・創遊館)
13:00 ～ 道の駅出発
13:30 ～ ⑤ 中越弁慶号(砺波チューリップ公園)
14:30 ～ ⑥ 島田孝之翁生家跡(高岡市中田)
15:30 ～ ⑦ 中越鉄道 黒田駅舎跡(看板)(高岡市下黒田)
16:30 ～ 散居村ミュージアム帰着・解散
(※ 時間配分は目安です。)
(※ 降雨の場合予定変更があります。)

次回の講座案内

第6回講座 シンポジウム (入場無料)

“城端線は何を変えたのか” 「どこへ行くとなみ野」

・と き 平成29年11月12日(日) 13:30～16:30

・基調講演 「 人の輪で まちも線路もみんな元気に

～ひたちなか市のとりくみ～

講演者 ひたちなか海浜鉄道社長 吉田 千秋氏(富山県出身)

・シンポジウム 「 連続講座を振り返って 」

パネラー ここまでの講座の講師陣などが話し合います。

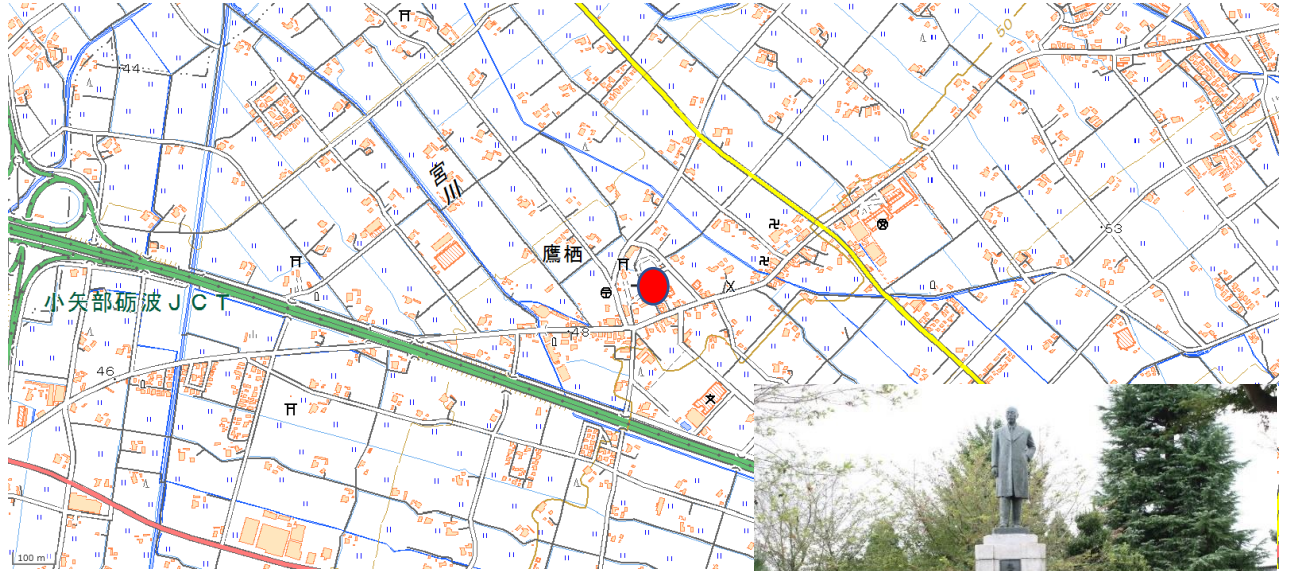
* 会場整理の都合、11月3日(金)まで、聴講の申込みをお願いします。

(学習講座5-1)

城端線、旧加越線の「見どころ」を探访します。

① 大矢四郎兵衛像

砺波市鷹栖地内



コラム 大矢四郎兵衛とは

・エピソード

1. 陽明学を学ぶ・・・「たとえ我が身が減ぶとも世を経め民を救う」
大石良雄、大塩平八郎、吉田松陰、西郷隆盛など
2. 砺波中学校の誘致・・・義倉金を元手に鷹栖村へ
3. 運輸事業とのかかわり・・・①明治 16 年 宮川を改修して宮川通船会社を設立
②明治 22 年 庄川運漕会社を設立
③大正元年 砺波軽便鉄道(後の加越線)の設立に参加
4. 農業改革を進める・・・①所有地の小作権の設定、売買を認める。
②養蚕の推奨・・・桑苗 1 万本を無償配布⇒副業化を推し進める。
⇒養鶏、養豚の飼育も奨励していった。
③明治 17 年 地租軽減の嘆願書を提出
④中越鉄道を退いた後、渡道して農場経営に従事
5. 公害問題と取り組む・・・①足尾鉍毒事件では田中正造と政府に立ち向かう。
②渡道後、農場のある小沢村で国富鉍山の煙害で公害が発生
・八乙女山をぶち抜き、庄川の水を砺波平野に落とす・・・灌漑・発電・工場誘致⇒「一挙七得」
・道路改修・・・出町・津沢・末友間、石動・鷹栖・青島間
・スポーツの奨励・・・剣道(山岡鉄舟門下生を招村。道場を作り、武具を寄付)
相撲(自らも好む。砺波各地であった草相撲に応援に出かけていた)
・描金(印金)の普及・・・金沢から蒔絵師を招いて、精巧な作品作りを目指した(明治 29 年)

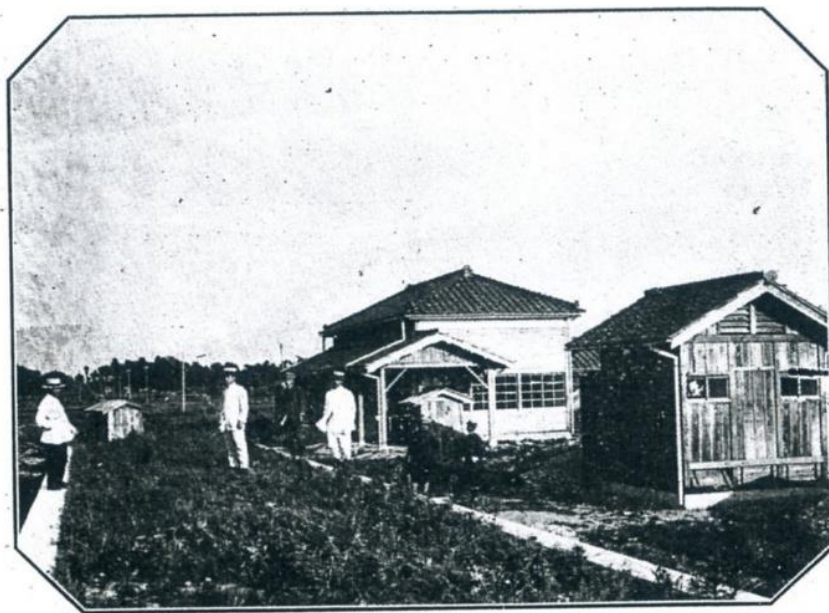
※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

② 旧加越線津沢駅跡

小矢部市岩武新地内



大正11年7月、加越線津沢駅が開業しました。



(驛澤津の中事工)



加越線の前身・砺波鉄道の敷設を目指した津島吉六を偲ぶ石碑「耆宿津島吉六翁追慕碑」が建っています。耆宿(きしゅく)とは、学徳のすぐれた老人という意味です。

「鉄債鬼 志ばし凌いで 来てみれば 粟津の秋は 酒友もなし 水雪」と書かれています。

鉄道敷設のために多くの借金を背負い、その返済に苦労しましたが、自身の生涯を顧みて句を詠んだものと思われます。

※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

●創業 ^{つしま}津島 ^{きちろく}吉六 (1853～1927)



津沢町生まれの実業家・政治家。津沢町の中興の祖。津島酒店代表。
明治33年、福野を中心とする両礪銀行を創立した。また明治初期には加賀藩の米倉庫だった場所に簡易小学校を開設したほか、県立礪波高等女学校(後の県立砺波女子高校)の創設に尽力。さらに津沢蚕業組合を組織し、産業振興を目指した。津沢郵便局、津沢戸長役場、津沢巡査駐在所、津沢消防組も創設。蟹谷往来(金沢と連絡する内山越え)建設や、中越鉄道創立時にも出資に協力するなど、大矢四郎兵衛とも深い親交を結んだ。

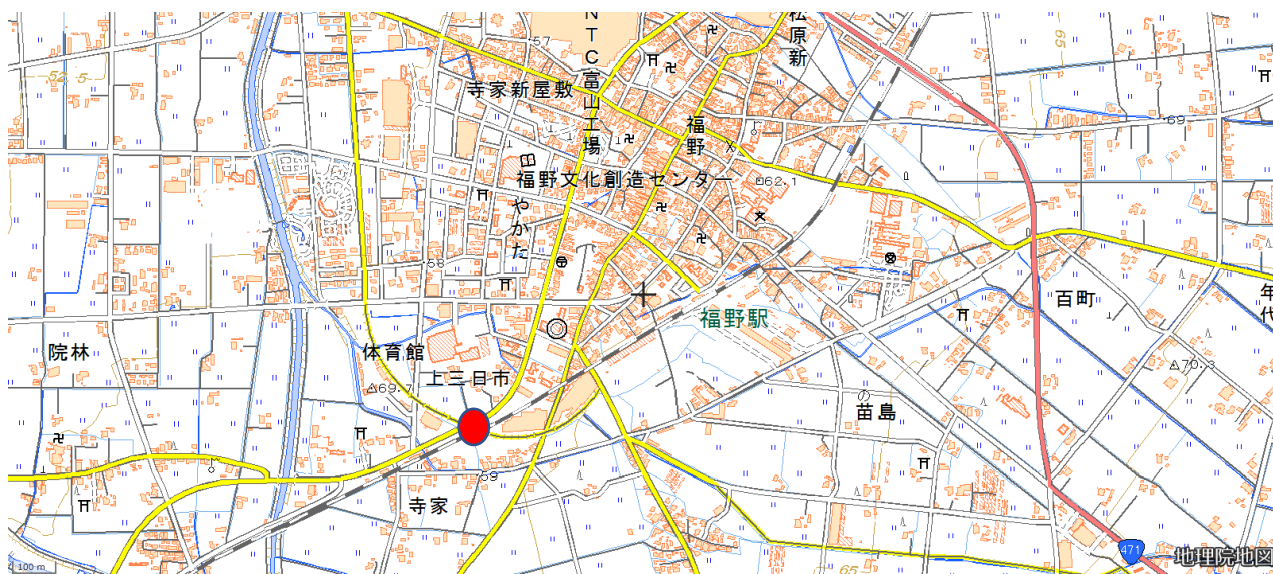
コラム 営業最終日の加越線津沢駅



※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

③ 城端線・旧加越線立体交差

南砺市院林地内



城端線と加越線が立体交差している地点です。富山県内最初で、他には滑川市・黒部市にある富山地方鉄道とあいの風とやま鉄道両線の立体交差があります。



右は加越鉄道開業時に撮影された写真です。

この立体交差は、中越鉄道の初代社長・大矢の発案により実現したと言われています。

※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁



この土盛りの際には、寺家の住民が総出で従事したと言われ、大正10年に施工されたそうです。写真をよく見ると、作業する人が映っています。

コラム 加越線柴田屋駅

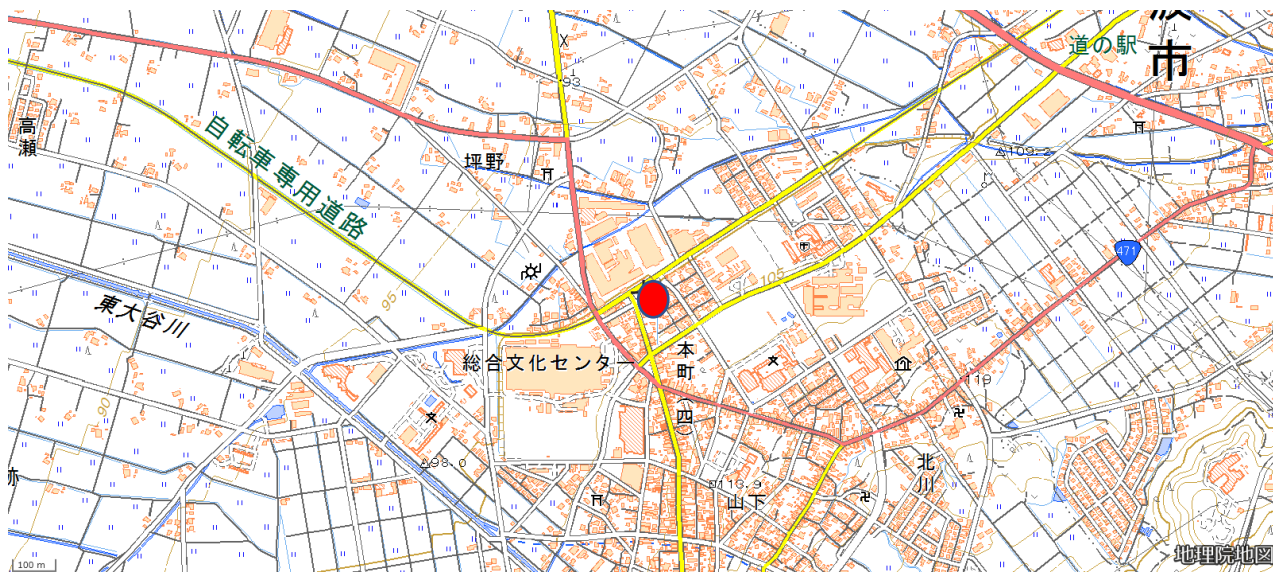
現在は道路となっており、そんな駅があったことを伝えるものは残っていません。

大正15年8月15日、地元・柴田屋の住民が当時の加越鉄道に請願し、安居寺口(あんごじぐち)という駅名で開業しました。しかし地元民から「柴田屋」に名称変更してほしいとの陳情があり、柴田屋駅となったエピソードが残されています。



④ 旧加越線井波駅舎

南砺市北川 181



※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

- ・この駅は、乗客駅というより貨物駅でした。

① 富山紡績(株)井波工場 現東洋紡(株)井波工場

「この井波工場は加越能鉄道井波駅に近く、その西南方の高台に敷地を選んだ。(中略)その最新の設備が既に業界の注目の的となっていた。(中略)北陸の京都といわれる井波町の古風な佇まいとはかけ離れた近代的な明るい工場であった」 『呉羽紡績三十年史』より(原文を読みやすく変換)

② 塚田木工(株) 現大建工業(株)井波工場

「原材料原木は、当初は飛州木材の青島貯木場から買い付けていたが、昭和7年(1932)同社の解散後は岐阜県の高山線や岩手県の山田線の両沿線から買い付けて事業を続けた」 『大建工業三十年史』より

- ・駅舎は、昭和52年に現在地(東へ30mほど)移動しました。

- ・昭和44年、鉄道会社は駅を撤去する方針を一旦示しましたが…

井波駅は、井波町のもつ瑞泉寺の門前町ということを表わすため寺院様式で昭和九年に建てられ、町のシンボルとしていたものですが、三十五年もたった現在、修理や維持費がかさみ負担となっていました。このため撤去したいと井波町へ申し入れていたのですが、このほど一部はこれまでどおり駅事務室、待合室として使用し、あとは町の物産館を設けることに町との話し合いがまとまったものです。この井波駅は富山県の駅のなかでも寺院の駅として唯一のものであり、町のシンボルとしてこれからも残ることになったわけです。(社内報『ちてつ』 昭和44年10月号より)

- ・井波駅開業当時は、違う駅舎でした。



上が開業当時の井波駅。

開業当時の井波駅舎は、現在残る駅舎ができた後は、高瀬村(後に高瀬神社と改称)駅として移転、廃線の年まで使用されました。



右が開業当時の高瀬村駅。

⑤ 中越弁慶号

砺波市花園町(砺波チューリップ公園内)



『砺波市広報』 第102号より

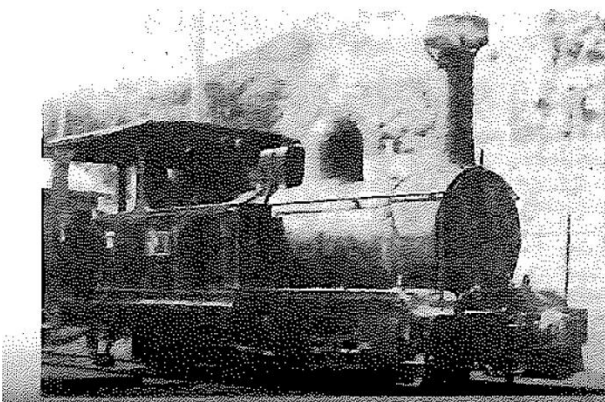
昭和40年3月15日発行の広報に、この機関車を譲り受けたいという記事が掲載されました。

「中越弁慶号」と名付けられた由来については、ハッキリした記録がありません。

新聞には、当時の大井敏雄砺波市長が命名した、と書かれています。

「砺波市史」より
北陸線がまだ開通していなかった頃、砺波の沃野を「陸蒸気」が走った。それは明治三十九年四月のことである。
もちろん、富山県で最初の鉄道路である。その名は「中越鉄道」という。
この中越鉄道は、砺波・射水・高岡の有志によって敷設された私設鉄道である。
事業の中心人物は、大矢四郎兵衛、堅栖の人である。
中越鉄道が砺波地方に及ぼした影響は、とくに米を伏木港へ容易に運搬できるようにしたことが増え、福野・福光・城端方面の絹・木綿・麻布などの生産を刺激

老機関車を 引き取っては……



（富山県ではじめてデビューした機関車）

老機関車は消えず！

いまだ約七十年前「中越鉄道」を、はじめて走った老機関車（重量約二十トン・けん引力百五十トン・イギリスのナスミスウェルソン会社製造）は、その後構内入り替え車として各地を点々。いまは、新潟県西頸城郡青海町の電気化学工業の引き込み線で、元気に働いていることなど、砺波地方の地域開発に果たした役割りは高く評価されるべきであろう。

この鉄道も、幾多の曲折を経て、大正九年九月、鉄道省に買収され、いまの城端線となる。約七十年の風雪に耐えた老機関車も、おしよせる近代化の波にはかたず、来年三月の車検切れで廃車されることが決まっております。廃車後のゆくえは「交通博物館」・「鉄道友の会」或いは関係市町などから引き取りが継続しています。

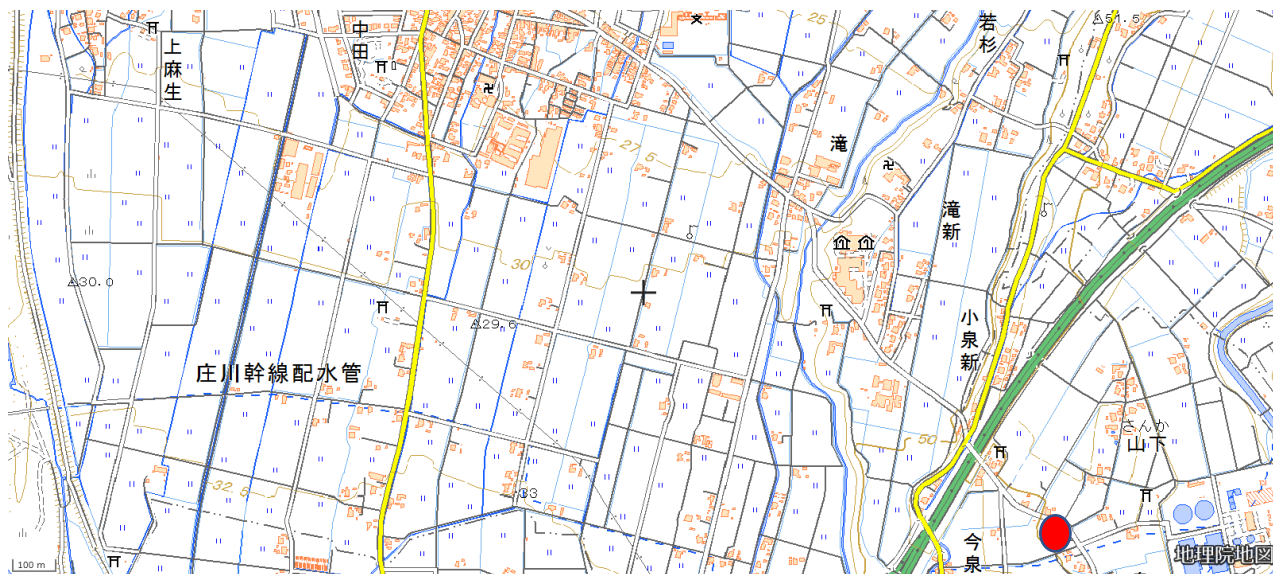
当市は中越鉄道として、この老機関車とはもともとゆかりの深い地であり、できることなら譲り受け、生きた資料として保存してはどうかと関係方面に働きかけ中でありま。

× × × × ×



⑥島田孝之翁生家跡

高岡市島新地内



嘉永3年、砺波郡島新村（現高岡市島新）生まれ、明治14年に政治団体北辰社、翌15年には越中改進黨を設立するなど、早くから自由民権運動に取り組みました。

明治21年、私設北陸鉄道（現 JR 北陸本線、IR いしかわ鉄道、あいの風とやま鉄道、えちごトキめき鉄道）の敷設を出願し、仮免許取得までに至るものの、実現には至りませんでした。



※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

コラム 城端線戸出駅・二塚駅

・JR 戸出駅

高岡市戸出

1. 戸出駅跨線橋 昭和29年12月完成（城端線で現存する跨線橋で、最も古いもの）

戦時中、強制供出によって一旦取り壊されましたが、乗降客からの再建希望が高まり、戸出町は80万円(当時)負担し、工事費240万円で建設されました。

「広報といで」昭和29年12月発行号より
昭和29年12月15日13:30から、跨線橋の渡橋式が挙行されました。
当日は雨模様でしたが餅まきも行われ、城端むぎや節保存会による「戸出音頭」のアトラクションも行われました。

「広報といで」昭和30年1月発行号より

2. 駅前の道路舗装

昭和34年、戸出駅前の道路舗装がされました。

「広報といで」昭和34年2月発行号より

3. 駅舎内にある戸出町物産品展示棚

昭和38年9月18日に設置されました。戸出町では清酒、和菓子（きんつば）、チューリップ球根、麻布（八講布）といった特産品がありました。

「広報といで」昭和39年1月発行号より

4. 日本海側で最古の現存駅舎



・ JR 二塚駅

高岡市二塚 2209

①平成 27 年 9 月まで JR 貨物の駅員がいました。

中越パルプ工業二塚工場への貨物輸送があったため。路線名は「砺波製紙線」。最終日は 10 両編成

②駅名が何度も変わりました。

明治 32 年 4 月 二塚駅

大正 3 年 2 月 二塚簡易停車場。このとき「ふたづか」

大正 6 年 4 月 二塚停留所

大正 9 年 9 月 二塚駅(国鉄に移管)

③駅の花「ひょうたん」 「北日本新聞」 昭和 55 年 9 月 16 日より

昭和 49 年、ひょうたんの産地へ旅行した駅員が種を分けてもらい、プラットホームに植えたのが始まり。7 月頃に開花し、1 ヶ月ほどで結実。飾り物にし、11 月 1 日から 10 日間、ホームや待合室に陳列して「ひょうたん祭り」が行われている。

地元住民のアイドルであり、旅行者の旅情をなぐさめてくれる・・・。

④ミニ日本庭園 駅入口横 「北日本新聞」 昭和 52 年 6 月 12 日より

「花壇のある駅」 空き地に花壇や滝。広さ 20 m²の「ミニ日本庭園」

⇒地域住民の触れ合いの場。駅舎南側の下線ホーム脇に造成

地域住民から松、モミジ、さつきなどが寄付される。

駅員 10 人と地域住民の労力奉仕により 3 ヶ月で完成。

二段滝の池に水が流れる。

「時価 70 万円ぐらいはするでしょう。今後も駅の美化に協力したい」

⑤この建物は何かわかりますか？なんと「駅浴場」。貨物列車を扱っていた駅員が利用していました。



※地図は、国土地理院(電子国土 Web)より転載。無断複製禁

⑦ 中越鉄道 黒田駅舎跡（看板）

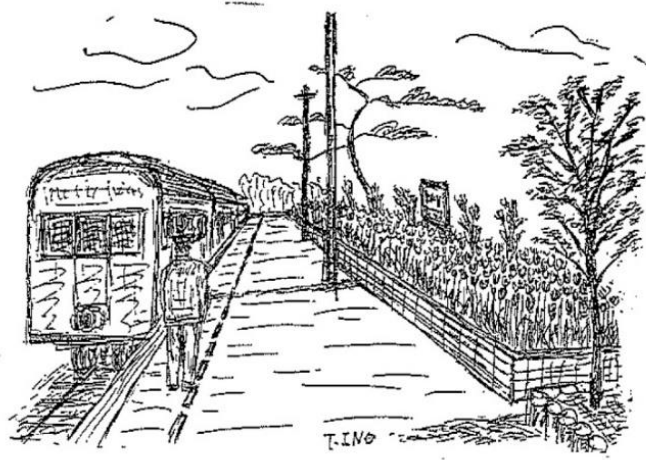
高岡市下黒田



初め黒田村を起点として城端までを運転し、高岡市への延長が最後になっていることである。後の人が奇異に感じるのは無理もないが、利害の対立や複雑な事情が伏在したのも何でもない。(略) 会社は北陸線高岡駅の予定地に従って、博労町に駅を設け、ここで起工式を挙げたのだが、間もなく大水害を見せつけられて鉄道局の考えが変わり、新しい候補地を物色して容易に決定しなかったもので、とりあえず、隣村黒田から着工し、三十年五月一部運転(黒田福野間)を開始するため、仮停車場を設けたまでである。その後北陸線高岡駅が下関地内(現在地)に決定を見たので、直ちに黒田高岡間の工事に着手し、竣工開通と同時に、黒田駅を廃した。その外に別段の意味はないのである。

(『高岡市史』下巻より一部抜粋)

コラム フラワーライン（常花線）



常に花咲く城端線

●生みの親 伊能忠敏氏

昭和5年10月 東京都生まれ

昭和28年3月 東京大学工学部

土木工学科卒

日本国有鉄道入社

昭和54年3月 金沢鉄道管理局長

国鉄本社施設部長、常務理事、首都圏本部長

昭和60年 金沢工業大学教授

平成18年 同学客員教授

伊能氏は、オランダにあるキューケンホフ（ケークンホフ）公園を、チューリップ公園がある砺波、そして砺波を走る城端線で実現しようと考えました。

「各駅のホームにチューリップの花壇をつくり、駅の回りに美しい花の咲く木も植えて、乗って楽しい夢の鉄道にするのだ」（著書のママ）

「常に花咲く線、常花線と書いても「ジョウハナセン」と読めるではないか。そうだ、砺波のチューリップを基軸として、年中花の絶えない常花線として売り出すことを考えてみよう」（著書のママ）

チューリップを中心とすることにしましたが、城端線各駅には、そのほかに独自の花を決めて植えることになりました。

「草花はきれいだが、やはり手間がかかる。城端線には無人駅が七つある。これらも花でかざるために、各駅に花木を植えよう。」（原文のママ）

伊能氏は昭和55年7月に、国鉄本社に転勤となりました。しかし、城端線のその後が気になってしょうがなかったといえます。

冬は雪の花ということにしても、夏に、秋に咲く花がなければ常花線とは言えないではないか。

「常に花咲く線への夢」 『あつ川の流れが反対だ』 伊能忠敏著より

城端線開通 1 2 0 年記念連続座

バスハイク「城端線をもっと知ろう」

大矢四郎兵衛翁銅像

説 明 資 料



平成29年10月15日（日）

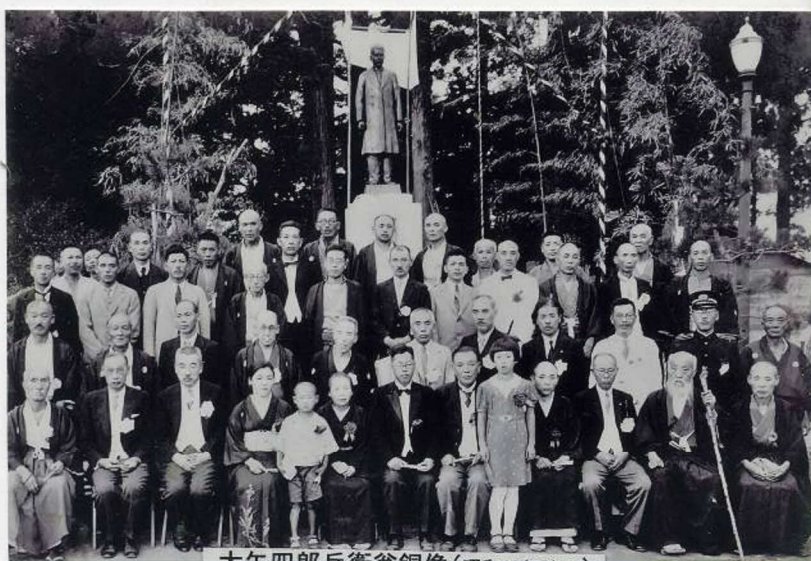
鷹栖自治振興会

大矢四郎兵衛翁銅像建立推移

○昭和13年8月20日 「従六位大矢四郎兵衛翁之像」 建立

- ・東西砺波郡の有志から寄付募る
- ・募金額 8,048円50銭
- ・費用内訳

銅像建設費	4,441円12銭
敷地費	1,512円27銭
除幕式費等	1,115円59銭
諸費	199円59銭
維持費	731円50銭
- ・銅像原型 東京高等工芸学校助教授 寺畑助之丞 氏
- ・銅像鑄造 高岡市商品陳列所 蓮花宗二 氏
- ・正面銘板 若槻礼次郎 氏 揮毫
- ・裏面銘板 尾崎行雄 氏 撰 吉波彦作 氏 書



最前列の右から
5人目の少女は
喜多（現姓：奥原）
麗子さん

○昭和35年8月19日 大矢四郎兵衛翁銅像のみ新設（戦時中に銅像を供出したため）

- ・鷹栖地区民から寄付募る
- ・募金額 426,874円
- ・費用内訳

銅像鑄造費	339,925円
基礎補修費	38,024円
除幕式費等	32,225円
諸費	12,469円
維持費	4,231円
- ・銅像原型 米 治一 氏
- ・銅像鑄造 堺 幸山 氏



○平成26年11月29日 大矢四郎兵衛翁銅像土台等修理工事

①土台周囲の石垣の修理



修理前



修理後

②銅像・台座・銘板の洗浄



洗浄前



洗浄後

③銘板の欠落文字の修復

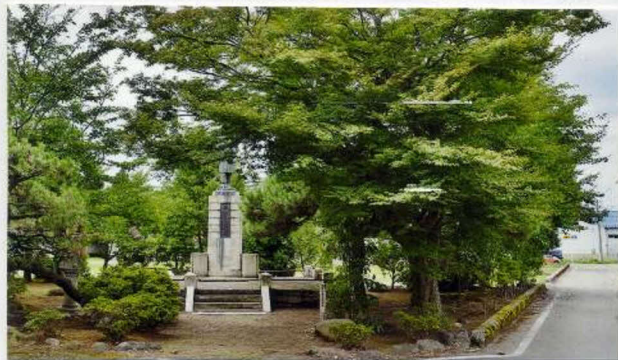


修復前



修復後

④周囲樹木の伐採・剪定



作業前



作業後

⑤参道の新設



工事概要

- ・自治振興会特別会計、砺波市地域再生事業補助金、寄付金（地区民ほか）等約500万円にて施工
- ・工事内容 上掲写真の5工事
- ・起工式 平成26年 9月23日
- ・完工式 平成26年11月29日
- ・施工者 鷹栖建工株式会社

大矢四郎兵衛翁年表

西暦	元号	年齢	主な出来事	鷹栖 村議会 議員	鷹栖 村長	富山 県議会 議員	衆議院 議員	小沢 村議会 議員	国富 山煙害 闘争
1857	安政4年	0	誕生(幼名 愛一郎)						
1858	安政5年	1							
1859	安政6年	2							
1860	万延元年	3							
1861	文久元年	4							
1862	文久2年	5							
1863	文久3年	6							
1864	元治元年	7							
1865	慶応元年	8							
1866	慶応2年	9	父死去						
1867	慶応3年	10							
1868	明治元年	11							
1869	明治2年	12	四郎兵衛に改名						
1870	明治3年	13							
1871	明治4年	14	兄嘉一郎(18歳)死去						
1872	明治5年	15							
1873	明治6年	16							
1874	明治7年	17	金沢竹下塾に入門						
1875	明治8年	18							
1876	明治9年	19							
1877	明治10年	20	井波町三清の若杉ちせ(13歳)と結婚						
1878	明治11年	21							
1879	明治12年	22							
1880	明治13年	23	母のい死去						
1881	明治14年	24	長女やい誕生						
1882	明治15年	25	越中改進黨結成、立憲改進黨に加盟、 砺波活版所 設立						
1883	明治16年	26	宮川通船会社 設立、 分通社 (鷹栖銀行の前身)創設						
1884	明治17年	27	中越新聞 発行						
1885	明治18年	28	県議会議員になる。 庄川通運会社 創設、改進黨機関誌「 北辰雑誌 」発行、地租軽減を請願			1			
1886	明治19年	29				2			
1887	明治20年	30	長男 武吉 誕生、鷹栖地区内に養蚕・養鶏・養豚を普及させる			3			
1888	明治21年	31	砺波米改良組合 を結成し組合長になる、中越新聞を 富山日報 に改題			4			
1889	明治22年	32	村議会議員になる	1		5			
1890	明治23年	33	次男 貞次 誕生	2		6			
1891	明治24年	34		3		7			
1892	明治25年	35	鉄道敷設計画(砺波－高岡－伏木)を思い立つ	4		8			
1893	明治26年	36		5		9			
1894	明治27年	37	富山日報 社長に就任、 中越銀行 創立	6	1	10			
1895	明治28年	38	中越鉄道株式会社 設立	7	2	11			
1896	明治29年	39	三男 敏範 誕生、中越鉄道工事着工	8	3				
1897	明治30年	40	鷹栖銀行 設立、中越鉄道の「黒田－福野」間開通・営業開始	9	4				
1898	明治31年	41	衆議院議員になる。中越鉄道「高岡－城端」間全線開通	10			1		
1899	明治32年	42	四男 好成 誕生、 富山日報 取締役役に就く	11			2		
1900	明治33年	43	「高岡－伏木」間開通。小沢村の未開墾地176haで大矢農場開設	12			3		
1901	明治34年	44		13			4		
1902	明治35年	45	五男 哲男 誕生、妻ちせ(38歳)死去	14			5		
1903	明治36年	46	政界引退。小沢村からさらに未開墾地133haの貸し付けを受け農場拡大	15			6		
1904	明治37年	47	後妻館田すいと子・武吉、敏範、哲男とともに北海道小沢村へ移住	16					
1905	明治38年	48		17					
1906	明治39年	49		18					
1907	明治40年	50	砺波中学校創設を知事に陳情。牧場経営にも乗り出す	19					
1908	明治41年	51	砺波中学校創設許可、義倉金3,000円を寄付。鷹栖村に大矢農場開設	20					
1909	明治42年	52	砺波中学校 創設	21					
1910	明治43年	53		22					
1911	明治44年	54							
1912	大正元年	55							
1913	大正2年	56							
1914	大正3年	57							
1915	大正4年	58	北大生の三男 敏範 、日本で最初のジャンプ研究者(ジャンパー)となる						1
1916	大正5年	59							2
1917	大正6年	60	小沢村議会議員初当選					1	3
1918	大正7年	61						2	4
1919	大正8年	62						3	5
1920	大正9年	63							6
1921	大正10年	64							7
1922	大正11年	65							8
1923	大正12年	66							9
1924	大正13年	67							10
1925	大正14年	68							11
1926	昭和元年	69							12
1927	昭和2年	70							13
1928	昭和3年	71							14
1929	昭和4年	72	鉱山煙害反対運動激化、小沢村農会長として運動の先頭に立つ						15
1930	昭和5年	73	仲間の離反で失意のうちに、北海道岩内郡小沢村にて死去、村葬される						16